

セマー宇宙の動き



トルコ共和国コンヤ県知事府
県文化観光局

トルコ共和国県知事府
県文化観光局出版 出版番号: 288

著者
メヴラーナの子孫
ジェラーレッディン・B・チェレビ

編集
県文化観光局

写真
Reha Bilir
Adem Karakaya
Özlem Gün Bingöl
Bülent Pirinçci
Bohem Tanıtım

細密画
Nusret Çolpan
Gülçin Anmaç
Fatma Zehta Aktaş

装丁
Şiraze Ajans

翻訳
Yelken Tercüme

インフォメーション
県文化観光局

Aziziye Mah. Aslanlıkışla Cad. No:5 Karatay/Konya - Türkiye
Tel: +90 332 353 40 21 Fax: +90 332 353 40 23
www.konyakultur.gov.tr - konyatourism@kulturturizm.gov.tr

印刷・製本
Bahçıvanlar Ofset

Fevzi Çakmak Mah. Ankara Yolu Üzeri Büsan OSB. Yanı 10633 Sokak No:11 Konya
Tel: +90 332 345 24 24 Fax: +90 332 345 2? ??

本ブローシャーは、コンヤ県知事府県文化観光局が、
総理府広報基金の支援で作成したものです。

出版日:2016年8月、コンヤ

セマー宇宙の動き



今この時が素晴らしい、
慈悲に満ちますように、
好事への扉が開かれますように、
魔事は遠ざかりますように。

(ギュルバング)



トルコ共和国コンヤ県知事府
県文化観光局



メヴラーナによるセマー

セマーは、アッラーの「我は汝の神ではないのか？」という問いに、魂のかけらたちが「そうです、あなたは我らの神です」という声を聴くこと、無我の境地に至り、神に出会うことである。

このかけらたちは陽の光のもと、スーフィー（神秘主義者）のようにセマーで清められるが、どの調べ、どのリズム、どの楽器でセマーをするのか、誰も知らない。

セマーは、心の中に秘められた自己から放たれる挨拶。

セマーは、生ける者の命への心地よさと安らぎ。それは心に命が宿っている者なら知っている。

セマーの支配の片方は東に、片方は西にある。セマーをすれば、どちらも互いの状態がわかる。



セマーは、心を奪われた愛しき人に会うためのもの。

心の中の月のような宝石が見えない人間には、音楽もデフ（タンバリンに似た楽器）も意味がない。

凍って氷になり、この音楽に何も感じることもない、死んで亡くなった者の、土の下にある命。 . .

セマーに入ると、ふたつの世界からも外へ出ることが出来る。

セマーの世界は、ふたつの世界の外側にある。

第7の（非常に高いことのたとえ）空の屋根は崇高な屋根だが、セマーの階段はこの屋根をも超え、この屋根よりも崇高だ。

メッカの方向を向いた人々はこの世にいても、あの世にいても、セマーにいる。

輪になってセマーで旋舞する者たちの中央にカーバ神殿があれば. . .

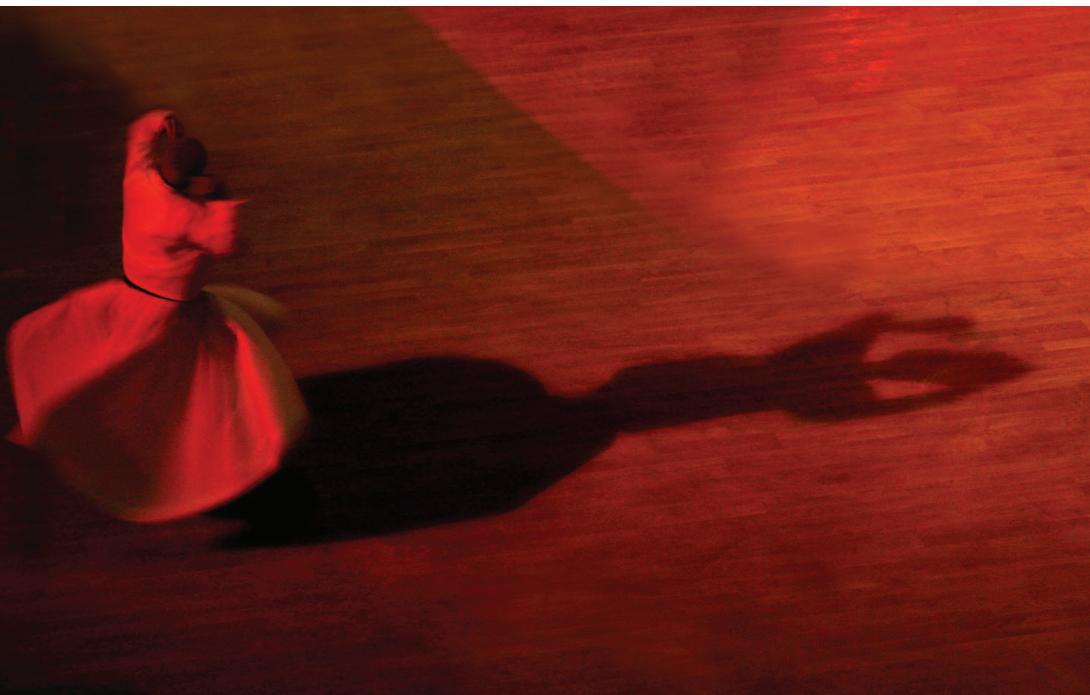


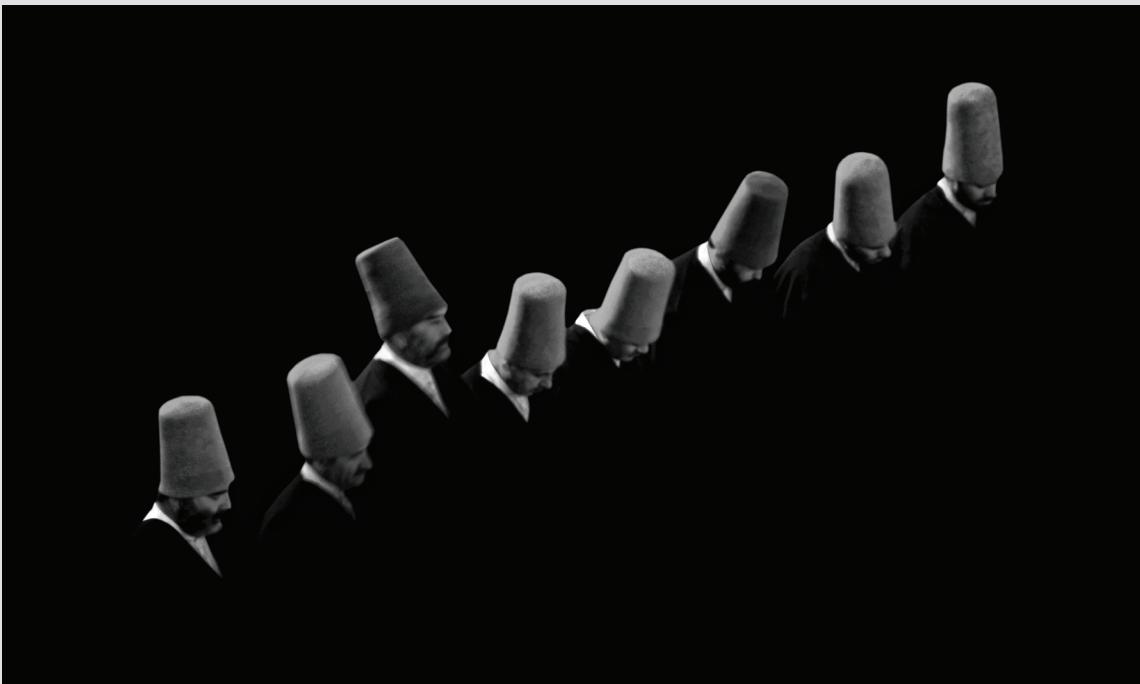
セマーと宇宙の動き

セマーは、トルコの歴史、習慣、信仰の一部であり、メヴラーナ（1207–1273年）の啓示から生まれ、発展した。円熟へ向かう精神的な旅路（夜の旅路）の往復を表す。

セマーを科学的に分析してみると、こういったことがわかる。存在の基本的条件は回旋である。数々の存在の中に見られる様々な類似点は、小さなかけらから遠くの星に至るまで、それぞれの構造を組織する分子電子と陽子の回旋である。すべてが回旋しているように、人類もその構造を組織する分子における存在が回り、身体中の血液が循環し、土から生まれ、土へ還り、地球と共に回ることで、自然と無意識に回旋している。ただし、人間が他の存在と違うより優位な点は知能である。そのため回旋するセマーゼン（セマーをする人）の様々な動きに合わせ、セマーと共に知能も動くのである。

セマーは、神の奴隸（人間）が真理、知能と愛情によって昇華し、欲望を放棄して、アッラーにおいて消滅し、そして円熟し、成熟した人間として再び奴隸に戻ることである。すべての存在に、すべての創造物に、新しい魂と愛情のため、奉仕のための回旋である。。。セマーゼンは上着を脱ぐことで、精神的に文学の世界へ、そして真理に向かって生まれ、そこで進んでいく。。。頭にかぶったスイッケ（メヴレヴィー教団の帽子）は墓石、来ているテンヌレ（白装束）は欲望の経帷子である。腕を組んだまま結び、「1」の数字を表現しているように見える。アッラーがひとつであることを表すセマーゼンは、セマーを廻るとき、腕を広げて右手は祈っているかのように天へ延び、アッラーの目で見た左手は地へ降りている。アッラーから得た善意を民衆へ放散することである。右から左に心臓の周りを廻って、すべての人間を、すべての生ける物を、ありつけの心で、愛情と愛で抱擁することである。。。セマーの儀式は7つに分かれている。各部分は別々の意味を持つ。





第1部

神聖な愛を代表する預言者を賛美する「ナアト」で始まる。

これを「ナアティ・シェリフ」という。

預言者を誉め称え、それ以前のすべての預言者と万象を創造したアッラーを称えることである。

第2部

この称賛のあと、キュドゥム（パーカッシュン）の音が聞こえてくる。

この鼓動はアッラーが（それは崇高なるもの）宇宙を創造したときの「キュン！」すなわち「成れ！」という命令を表している。

（コーラン、ヤースィン章36/82）



第3部

第3部ではすべてに命を吹き込んだ「息」を、すなわち「ネフハ・ユ・イラーヒイエ（アッラーの息）」を表すネイ（尺八に似た縦笛）の演奏部分が聞こえてくる。

第4部

スルタン・ヴェレドの時代。

これは、セマーゼンが互いに3回挨拶をし、ペシレヴ（前奏曲）の調べにのって円を描きながら歩くことである。隠された魂の、他の魂に対する形式的な挨拶である。



第5部

セマーの儀式は4つのセラーム（挨拶）である。セマーゼンは、着ている黒い上着を脱ぎ、象徴的に真理に向かって生まれる。腕を組み、数字の「1」を表す。このようにして、アッラーがひとつであることを証言する。シェイフ・エフェンディの手に接吻し、セマーに入る許しを請う。セマーを始める。セマーは4つのセラームからなる。

第1セラームは、人間が、知識で真理に向かって生まれ、崇高な創造者とその奴隸を理解することである。

第2セラームは、人間の生まれながらの秩序や高潔さを監視し、アッラーの偉大さを称賛することである。

第3セラームは、人間の称賛や感謝の気持ちが「愛」に変わることで、「知能」が「愛」の犠牲になることである。これは完全なる服従であり、アッラーとの邂逅である。アッラーの存在の前において消滅することである！仏教の究極の境地である「涅槃 - ニルヴァーナ」であり、イスラムにおける「フェナーフィッラフ（アッラーの存在の前には何もなくなる）」である。ただし、イスラムの最高の境地は奴隸の位である。

第4セラームは、人間が精神的な旅路を終え、運命を受け入れ、本来の役割である奴隸に戻ることである。このセラームにはシェイフ・エフェンディやセマーゼン長も加わる。この点でセマーゼンは、「アメネル - レスリュ」における（コーラン・バカラ章2/285節）アッラー、天使たち、本（コーラン）、預言者たちを。。。信仰の歓喜の中にいる。自己に、エゴに勝つて、預言者の「死ぬ前に死ね」と、コーランの（フェジル章89/27-28-29-30節、最後の章）「おい、信用し、信仰している魂よ、お前は彼に満足し、彼もおまえに満足している。神に戻れ！本当の奴隸の仲間に入れ！彼らとともに天国へ行くのだ！」という命令に従い、その歓喜に圧倒されたのだ。



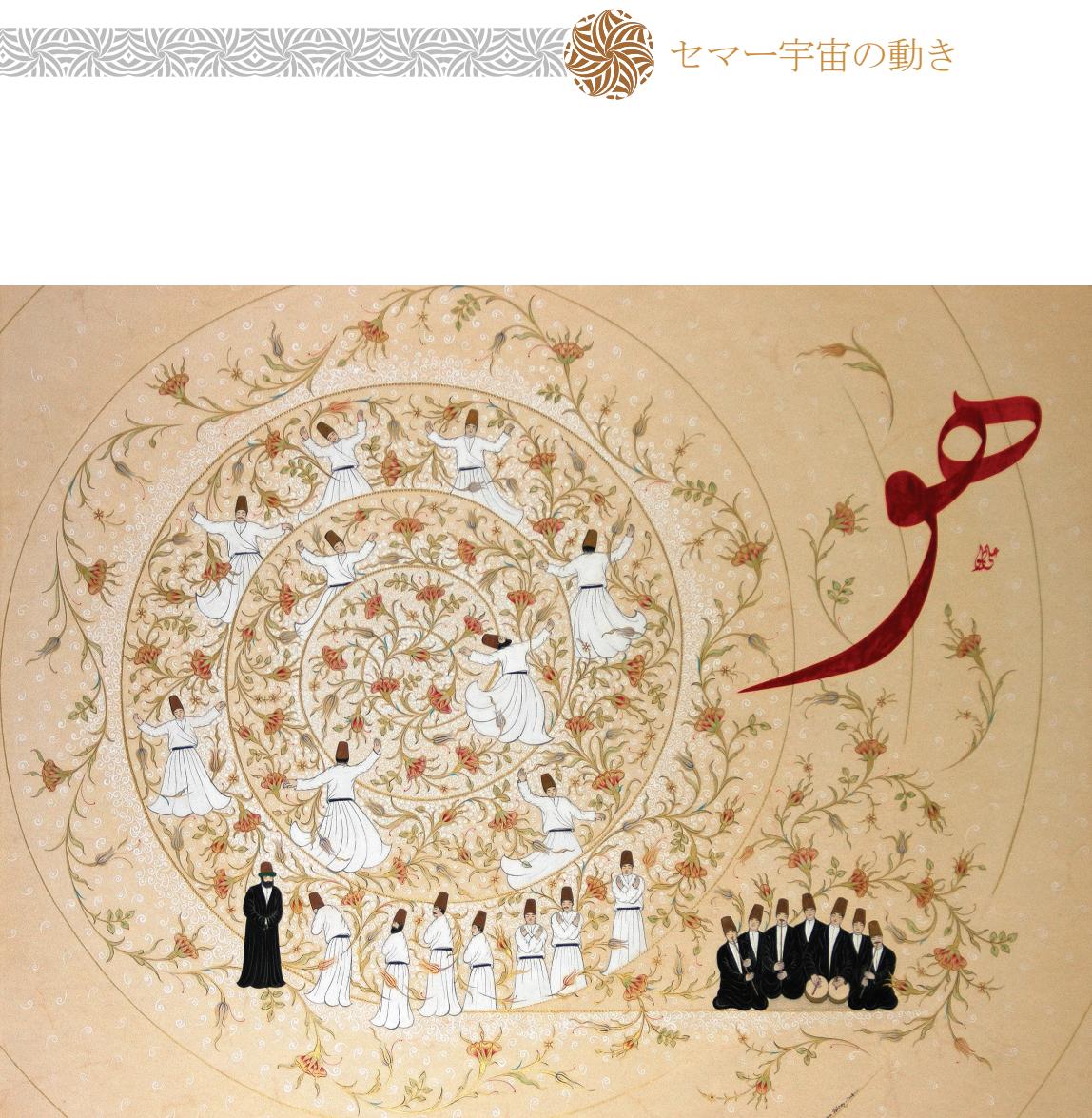
第6部

セマーの儀式の第6部では、特に「東もアッラーのものである、西も。どちらに向いてもアッラーの御顔はそこにある。アッラーは万能で、博識であるから。」（バカラ章2/115節の読誦が続く）

第7部

第7部のセマーの儀式は、すべての預言者たち、殉死者たち、そしてすべての人間たちの魂のために詠みあげられるファーティハ

（コーランの序章）と国の救済のための祈りで終焉を迎える。デデ（精神的長老）たちや托鉢僧たちは、セマーの返答の後、誰とも口をきかずに、瞑想に入るため、静かに独房へ立ち去っていく。





愛であれ、
愛よ顔にあたれ、
顔は光で満ち溢れ、
光は目を照らせ。
(メヴレヴィー・セラーム)





メヴレヴィー博物館で
使用されている楽器



レバーブ

本体がヤシの実でできており、前面には薄い皮か、あるいは大型動物の心膜が張られている。本体に内側から取り付けられた木製の柄の丸い先端に、やはり木製の旋盤細工取り付けられている。木製、あるいは金属製のスタンドが付属している。弦は、本体にピンと張られた皮革の上に乗っているブリッジの部分に取り付けられる。レバーブの音は、弓の動物の毛の束と弦の毛の束との摩擦によって奏でられる。

哀愁を帯びた、非常に内面的で物悲しい響きを持つ。



ネイ

ネイは、一定の間隔に並んだ9つの節からなり、黄色く硬い、織維の詰まった葦でできている。暑い地域の湿地に生えるこの葦には、それぞれ異なったいくつかの種類がある。最もよく使われるものは、ナイル川、アースイ川、そしてジェイハン川の河畔に生える葦である。一か所の葦床に生える何千本もの葦の中でも、ネイに適する葦はほんの数本に過ぎない。自然のつくりを生かしながらネイの形にされた葦には、塗装やニスなどは一切施さない。

メヴラーナの思想におけるネイは、「完璧な人間」の、すなわちある一定の段階を経て成熟した人間の象徴である。黄色く変色し、内側がくりぬかれ、穴が開けられ、もといた場所を懐かしがって悶え、胸の奥からの叫びやうめき声で、全人類に秘密をささやくこの友は、創造の根底にある愛を説く。

クドウム

径が約28—30cm、深さ16—18cmの鍛造の銅製の器の上に柔らかいもみ皮、あるいは紐で1—2mmにまで薄くしたラクダの皮をピンと張ってつくられる。

クドウムは、「ザフメ」と呼ばれる、約24—28cmの長さの固く重い木でつくられた、先端が丸くなった2本のバチでたたいて音を出す。クドウム奏者を「クドウムゼン」という。クドウムの小型のものを「ナッキャーレ」、大型のものを「キヨス」といい、このふたつの楽器はたいていメフテル（軍楽隊）の音楽に使われる。

メヴレヴィー教団は、ネイと同じようにクドウムも神聖なことにちなんで、「クドウム・イ・シェリフ」と名付けている。

メヴラーナに捧げられたある詩でも、ネイとクドウムについてこのように語られている。

葦は乾き、ザフメは乾き、乾いた銅に張られた皮も乾き、
それなのに、こんな親しみの音はどこから出るのか。





ベンディルとダーイレ

30－60cmの径で、普通はクルミの木でできた6－8cmの幅の枠の片面に1mm以下の厚さのラクダ、牛、ヤギ、ヒツジなどの動物の皮を張ってつくられるベンディルは、宗教音楽のみに使われた。他のテッケ（修道場）音楽の楽器のように、神聖さにちなんで「ベンディル・イ・シェリフ」あるいは「マズハル・イ・シェリフ」といった名で呼ばれるこの楽器は、腰の高さで枠を片手で下から持つて鳴らす。膝につけたり、脚の間にはさんではならない。ベンディルは、枠を持っていない方の手の内側、外側、あるいは指先、指の外側を使って様々な角度、強さでたたいて鳴らす。触れる場所によって、たたいたりこすったりということもできる。たたいている方の手に合わせて、枠を持っている方の手指を使う。

ベンディルの奏者は「ベンディルゼン」、ダーイレの奏者は「ダーイレゼン」、デフの奏者は「デフゼン」と呼ばれる。

ハリーレ

互いにぶつかり合わせたり、かぶせ合ったり、こすり合ったりと、様々な接触によって奏でられるこの打楽器は、一組の鍋の蓋を思い起こさせる。中央に開けられた穴に皮の取手がそれぞれとりつけられる。リズムをとるとき、高い、あるいは中間の、長いあるいは短い周波の音を出すことが可能である。

メヴレヴィー音楽で使われる鉦は、メフテル音楽で使われるものよりも径が小さく、「ハリーレ」と呼ばれる。ハリーレの奏者は「ハリーレゼン」と呼ばれる。





「セマーは愛の栄養である。

セマーにはアッラーに巡り合う夢があるからである」
メヴラーナ

